
God only(one) knows

クリイブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

God only (one) knows

【Nコード】

N3666V

【作者名】

クリイプ

【あらすじ】

幼稚園の卒園式の日、ルミちゃんの三つ編みにした髪を思い切り引つ張った僕は、他のみんなと同じように、一生に一度しか使えないきれいな赤い切符をもらった。悲しみに包まれた十三歳の僕は、その片道切符を使って旅に出る。ぬいぐるみの街、犯罪者の街、少数派の街……。いくつもの風変わりな街を経て、僕はどこへたどり着くのだろう。 *他サイトとの重複投稿になります。よろしく
願います。

13歳の僕は旅に出る

6歳になったばかりのことだった。

吐き気がするほど平凡で、目立たなかった僕は、幼稚園の卒園式でなぜだかわんわん泣いてみんなから優しい声をかけられているルミちゃんを見ているとむかむかしてきてルミちゃんの三つ編みにした髪を思い切り引っ張ったら父親にぶん殴られた。

そんな僕もルミちゃんもまわりで騒いでいた同い年の子も何かなんだか分からず一緒に泣いて泣いていた子もそんな騒ぎがあつていたことを知らない子も、みんながみんな幼稚園を出るときに綺麗に包装された真っ赤な切符を受け取ると、何分か前に園長先生が言っていた言葉なんかすっかり忘れたまま母親と手を繋いだり幼稚園の前で写真を撮ったりしてそれぞれの家に帰っていった。

「あなたたちがその切符を使わないことを心から祈っています」

僕は十三歳になった今でも、そう言っていた園長先生の顔を忘れることができない。

何か言いたいことを必死で飲み込んでいるような、大きな三匹のナメクジでも飲み込んでいるような。

今思えば、あの白髪だらけで口の臭かった園長先生は、真剣に僕らのことを想ってくれていたんだろう。

そんなくだらない切符を使うことなく、僕らにちゃんとした大人になってほしいと、そう祈ってくれていたんだろう。

でも世の中は不公平で、どうしようもなく悲しい出来事に満ちていて、そんな辛いことに全員が耐えられるようにはできていない。

だから……。

十三歳の誕生日の夜（つまり今夜！）、僕は旅に出る。

三日分の着替えと、母親の財布から抜いた六枚のくしゃくしゃの

一万円札と、真っ赤な切符をリュックに詰め込んで。

がたん、ごん

誰もがその赤い切符を持っていたけど、誰もそれが僕たちをどこに運んでいくのか知らなかった。

確かに分かっているのは、その切符は毎週金曜日と土曜日の間の、終電が終わったはずのホームにやってくる寂れた電車に乗るときにしか使えないことと、その電車に乗った人間は今まで一人も戻ってきていないということ。

そんな都市伝説を具現化したみたいな電車が実在するものだから、その電車に関する噂の数はハンパなものじゃなかった。

先週離婚したAの行方が分からなくなったのは、切符を使って過去に行き、別れた奥さんとやり直しにいったんだ、とか。

学校でいじめられまくっていたBが急に学校に来なくなったのは、切符を使ってあの世にいつてしまったからだ、とか。

医者から余命3ヶ月を宣告されたCは、切符を使ってどんな病気でも治してしまう仙人の住むところに行ったんだ、とか。

いつも駅前に寝ていた浮浪者のDを急に見かけなくなったのは、切符を使って惑星から惑星へと旅をしながら空缶を拾っているからだ、とか。

信憑性の高そうなものからくだらないブラックジョークまで、そういう噂は絶えることがなかった。

特に小学生だった僕の周りにはそういう噂が腐ってヘドロみたいな臭いを放つほどあって、中にはその電車に乗ったことがあるなんて言いふらす馬鹿も何人かいた。

ただ噂のほとんどに共通していたのは、『傷ついた』人がその場所や状況から『逃げ出す』ために切符を使って、『どこか』へ行ってしまった、ということだった。

僕はそんな色も存在もまともじゃない切符をリュックから取り出して、じつくりと眺めてみる。

赤地に黒い字で書かれた森川勇雄という僕の名前と、『行き』という大きな文字。もちろん『帰り』なんて文字はどこにもない。そして、すでに切符の端に刻まれた、鋏の跡。

揺れる電車の中でそんなものを眺めるうちに、僕は自分を取り返しのつかないようなことをしてしまったような気分になって、ばくばくと弾けそうな心臓を落ち着かせるために切符をリュックの一番奥の方に押し込んで深呼吸をした。

がたん、ごとん。がたん、ごとん。

電車の振動が、窓に引っ付けていた僕の頭を小さく揺らしていた。窓に映る僕の顔と窓の向こうの景色を一緒に見ながら、僕は最近流りのＪ ＰＯＰソングを小さく口ずさむ。

最近母さんの部屋でよく流れていた曲。もう二度と思い出したい風景の一部のはずなのに、ふと気がつくと口ずさんでしまっている。

そんな下手くそな歌と一緒に、見たことのない景色はどんどん後ろに遠ざかっていき、また新しい知らない景色が現れていったかと思うといつの間にか消え、それをくり返すうちに外には木ばかりしか見えなくなってしまった。

この電車は、もう僕の知っている路線なんて走っていないんだろ
う。

僕がいつも学校に行くときに乗る電車に乗っていたなら、ちょうど今ごろは左手に大きな学習塾が見えてくるはずだ。でもそこにはただ個性の欠けた木ばかりしかない。

ふと僕の頭の上に影が落ちる。窓ガラス越しに車掌の格好をした男が蛍光灯の光を遮るように立って、僕の顔を覗き込んでいるのが見えた。

「お客様、」

相変わらずのしゃがれ声。僕の切符に鋏を入れた時と同じように、

男は紺色の帽子を触りながらゆっくりと言った。

「まもなくこの電車は長い長いトンネルに入ります。もう時間も遅いですし、そろそろお休みになられた方が」

僕は頷き、そして目をつむった。

まぶたの向こうから影が消え、カツンカツンと足音が遠ざかっていくのを確かめて、僕はまたゆっくり目を開けた。

ぐっすりと昼寝をした日の夜のように、眠れる気がなかった。ほとんどがすでに眠りにについている、同じ車両に乗る7人の乗客の神経が、僕には理解できそうになかった。

若くて綺麗な女の人、サラリーマン風の中年男性、黒いランドセルを背負った子ども……。彼らは本当にどこにでもいそうな姿をしていた。彼らが何年も何年もどこか暗い場所にしまっていた赤い切符を取り出すところを想像すると、僕は何だか愉快的気持ちになってくる。

目の前の黒い窓に、水滴が一粒落ちて流れていった。ひよっとするとまた雨が降り出すのかもしれない。

そんな緩慢な水滴の流れを見ると、不意に自分が赤い切符を取り出した時のこと（たったの数時間前だ）が一気にフラッシュバックして、僕の愉快的気分なんてすぐに消え去ってしまった。

母さんのかん高い叫び声、花瓶の割れる音、そして僕の激しい息づかいと、降りしきる雨の音……。

僕はふるふると頭を振って、そういつたりアリティを全力で頭から追い払った。

雨足は段々と強くなり、電車の天井からはぜるような音が聞こえてきたかと思うとぴたりと雨音はやんでしまった。電車はトンネルに入ったんだ。

少し古いやつみたいだけど、トンネルの中を電車はのんびり快適に進む。やっぱり疲れていたのか、僕はいつの間にか眠りに落ちて

いた。

目を覚ます。まだトンネルの中なのだろう。顔を上げるけれど、外の景色は暗く、何も見えなかった。

ふと視界の隅の人影に気づいてそちらを向くと、同じ車両に乗っていた若い女性客が僕の隣の席に座っていた。僕が目を覚ましたと分かると、彼女は車内をキョロキョロと見回してから、言った。

「わりと普通の電車だと思わない？」

まだイマイチ意識のはっきりしない僕が黙っていると、彼女はふう、と口から吐き出してかた言った。

「誰も乗ったことのない電車なんて聞いていたから、どんな物が出てくるかと思ったのに……、拍子抜けしちゃったわ。私はチエ、あなたは？」

「……森川勇雄」

僕は女性に疑うような視線を投げつつ、とりあえずそう答えた。

「モリカワくんね。あなたもこんな電車に乗っているくらいだから、きつとまともじゃないんでしょうね。彼らと同じように」

チエはそう言って、他の乗客たちの方にちらりと目をやった。彼らはまだ気持ち良さそうに眠り続けていた。

まともじゃない、僕はその言葉にムツとするけど、よく考えたら僕に自分自身がまともだと言い切れる自信なんてなかった。僕はあいまいに頷いておいた。

「そうかもしれない」

チエはちよつと笑った。僕はさらに言う。

「じゃあさ、同じ電車に乗っているんだから、あなたもまともじゃないの？」

僕がそう言うのと、チエは少し上を向いて考える素振りを見せた。二十代の半ばくらいだと思うけど、崩れた化粧は彼女の目が大きくて整った顔を少し老けて見せていた。

「あるいはそうかもね。好きで好きで結婚しようとしていた男にお金を持ち逃げされたあげく、性欲のカタマリみたいな筋肉ムキムキの馬鹿共の中に置き去りにされて、頭のタガが外れちゃったのかもね。そうじゃなきゃこんな薄い紙切れなんか、一生頼ったりしないわよ」

チエはそう言うのと赤い切符をシャツの胸ポケットから取り出してひらひらと振ってみせた。

「モリカワくんはどうしてこんな……。いや、聞かないでおくわ。どうせろくな話は聞けないんだし。あら？」

その瞬間、目がくらむような朝の光が窓から入り込み、すぐに車両内は暖かい光で満たされた。僕は慌てて窓から差す光を手でさえぎって目を守る。

「ようやくトンネルを抜けたのね。あなた、今何時か分かる？ 時計忘れてきちゃったのよね、っていつかあのときに壊れちゃったんだけど」

「7時半だよ」

僕は腕時計を見てからそっけなく答える。そして光に慣れてきた目で外の景色を眺めてみる。

それは見たことないんだけど、本当にどこにでもありそうな景色だった。

トンネルに入る頃に比べると木の数は少なくなつて、少し離れた所には幅が狭く、石の多い川が流れていた。遠くには山といえるほど高くない、緑の茂ったいくつかの丘が見渡せた。見る限り田畑はない。でも道は整備されていなくて、人の住んでいる気配もしないけど、そのうち家も見えてきてもおかしくない、僕はそう思った。

簡単に言つとそこは、家は見えないけど、あつてもおかしくないくらいの、なんでもない田舎の風景つてこと。

「なんだか普通だ」僕はつい、そう口に出した。

「当たり前じゃない、電車でちょっと移動したつてだけで。別にワープしたとかタイムトンネルをくぐったとかした訳じゃないんだから。それともあなた、トンネルを抜けたら妖精たちの住む世界でした、とかを想像してたの？」

チエはそう言つとふふつ、と唇の端をあげるようにして笑つた。その少し疲れた笑顔から僕は同級生にはない大人の魅力つてものを感じて、言おうとしていた「自分だって変な電車を想像してたくせに」、つて言葉を飲み込んでしまった。僕は代わりに、

「チエはこの電車がどこに行くか知ってるの？」

「チエさん」

「え？」

「チエさん、だって。目上の人を呼び捨てにするなんて、モリカワくんはお父さんに習わなかったのかな？」

「うるさいな」

「ああ反抗期なんだ、カッコ悪い。子どもってほんと羨ましいわよね、何かっていうと親が世話焼いてくれるし」

僕はよっぽど彼女を殴りつけてやろうかと思ったけど、大人な僕は持ちかけていた好意を電車の窓から捨てるだけにしておいた。

誰にだって誰かに当たりたい時はあるって、そんなこと十三歳の僕だって知ってるんだ。

でも僕に当たられるのは迷惑だから、僕は目を閉じてやり過ごすことにする。僕は二度寝をするのでしばらく話しかけないでくださいね、と。

「ねえ、ちよつと」

それでもチエは迷惑なことに僕に話しかけようとする。もちろん無視だ。

「ちよつと、あれ見てよ」

今度は僕の腕を掴んで揺すりながら言うので、僕は仕方なく、なるべく迷惑そうな顔を作って目を開けた。

そして僕はすぐに窓から見える、『それ』の存在に気が付いた。

「あれ、何ですか？」その言葉は、チエを無視するはずだった僕の口から自然とこぼれていた。

「私を知るわけないじゃない。でも、あれ……」

僕たちは言葉を失っていた。その大きさに、というか、『それが放つ圧倒的な存在感（というか違和感）に。

一九〇一年、アメリカ合衆国イリノイ州に、後にあるキャラクターを生み出して世界的に有名になる男が誕生した。

彼は七歳の頃には自分の描いた小さなスケッチを近所の人たちに売り、十九歳で初めてアニメ作品を手がけ、二七歳になるとネズミを模したキャラクターを生み出してアニメーションの興行的な先駆者となった。

そして現在もそのキャラクターは大勢の人に親しまれ、千葉県にはそのキャラクターが歩き回るテーマパークも作られている。僕も小さい頃に一度だけ家族で行ったことがあった。

どうしてそんなキャラクターの巨大なオブジェ（それ以外の表現が思い付かない）が木々の間にそびえ立っているのか、僕にはどうしても理解が出来なかった。そも大きさは一度だけ見たことがある、太陽の塔ほどもあった。

ここは千葉県から三百キロは軽く離れているはずだし、そもそも、そのテーマパークにさえあんな馬鹿げたものは無かった。

木々の間にそんなものがぼつんとその存在感を主張しながらそびえ立っているというのは、ただただ異様で、ひどく気味が悪かった。

「何か気持ち悪い、あの笑顔がなんとも……」

チエも同じような感想を持ったみたいで、不安そうな表情で呟いた。

同じ車両に乗る乗客たちもいつの間にか目を覚ましていたみたいで、それぞれ窓に顔を近づけて奇妙なオブジェをけげんな表情で眺めていた。

そんな時に、間の抜けた、ポーンとかいう木琴を鳴らしたみたいな音が車両内に響いたものだから、僕は驚いて肩をびくりと震わせてしまった。

「当電車はまもなく最初の停車駅に到着いたします。お降りのお客様は、忘れ物などなさらぬよう」

そして聞こえてきたそんなしゃがれ声に、僕とチエは顔を見合わせる。

「駅に着くみたいだね、最初の停車駅って言ってた？」
「どこだろう？ 最初の停車駅ってことは、終点って訳じゃないんだ」

そう言った僕の顔には、きつと不安が貼りついていたはずだ。自分の全く知らない世界に対する、漠然とした不安。自分の日常が少しずつ非日常に飲み込まれていくような不安。

がたん、ごとん。がたん……、ごとん……。

電車は少しずつスピードを落としていった。

ふと外を見ると、そこには僕の予想どおり何軒かの家が建っていた。

どの家もレンガが使われてちょっと洋風で、どこか古臭くくすんでいたけど、意外と普通だな。僕はまた、そんな風に思った。

RAGDALL TOWN (上)

その光景は少なからず僕を（そしてたぶんチエを）驚愕させた。近づいてきたホームに置かれていたのは、様々な大きさの、数えきれないくらいぬいぐるみだった。プラスチック製の青いベンチの上に、階段の一段目と二段目と六段目に、喫煙所の灰皿の横に。まるで、僕らを歓迎しているみたいに。そこにあるのが当然のことみたいに。

電車がスピードを落とすにつれて、ぬいぐるみの姿もはつきりとしてくる。肌色の肌、目と、口と、髪と、耳。ふわふわして気持ち良さそうなのは、どれも人間を模して作られたものみたいだった。

「なによ、あれ……」チエは小さくつぶやいた。僕は何も言えなかった。

ホームには一人の人間もおらず、それがまた僕の不安とも恐怖ともつかない感情を煽った。いくつもの、ぬいぐるみ達の焦点の曖昧な視線を感じてしまつて、僕は自分の腕に鳥肌が立っていくのを感じた。

それから僕らが一言も口を聞けないでいるうちに、電車はゆるやかにホームに停車した。

僕とチエが立ち上がり、様子を見るために電車の扉の前に移動すると、迷うそぶりを見せながらも他の乗客もそれに続いた。僕らが外の様子をうかがっていると、不意に例のアナウンスが流れ始めた。

「ぬいぐるみの街、ぬいぐるみの街。お降りの際はホームと電車の間が広く開いている場合がございますのでお気を付けください」

ぬいぐるみの街。確かにそのホームの中央には、『ぬいぐるみの街』と書かれたプレートがかけられていた。次の駅の名前は書かれていない。

プシューとかブシューとかいう音と共に、ぬいぐるみの街と僕らをさえぎっていた扉が開いた。

「どうする?」

「どうするっていつでも……」

顔を見合わせておろおろとする僕らの頭の上に、また、車掌のアナウンスが流れ出す。

「この電車は当駅に二日間停留いたします。出発は二日後の九時となっております。お乗りのお客様はくれぐれも遅れることのないようをお願いいたします」

その言葉を聞いて、僕らはまた顔を見合わせた。

「とりあえず、降りましょうか」

チエの言葉に頷いて、僕はリュックを背負い電車から降りた。

そこに置かれた老人や子ども、中年の女性といったぬいぐるみを眺めながら気味の悪いホームを早足で抜けると、改札にはちゃんと普通の駅員さんがいて、僕はなんだかひどく安心した。

駅員さんが言うには、改札を出ても切符を無くさない限りまた同じ電車に乗ることができるそうだ。でも僕らが乗ってきた以外の電車には、切符に入れられた鉄の形が違って乗ることができないらしい。

「だからもしこの街を出るのなら、あさつての九時の出発の時間に

は絶対に遅れないようにしなさい」念を押すように、駅員さんはそう言った。

僕らが頷くと、中年の駅員さんはにこりと笑ってまた次の乗客の切符を確認し始めた。

ホーム自体はなんの変哲もないもので、朝の明かりの差す駅の出口もすぐそこに見えていた。いろいろと不安はあるけど、僕は自分で決めて電車に乗ったんだ。「うん」

僕が勢いよく歩き出すと、すぐにチエが服のすそを引っ張るもんだから、僕は何だか出鼻をくじかれたような気分になって立ち止まった。

「何だよ？」

「ちよつと、あれ見てよ」

僕の耳のそばで、チエはそう言うのと、切符の確認をしている駅員さんの方を指差した。

その指の先は、ちよつと僕たちと反対側を向いた駅員さんの背中を差していた。そのお世辞にも広いとはいえない貧相な背中には、小さな赤ん坊のように見えるぬいぐるみが、しっかりとひもでくくりつけられていた。

その姿はまるで子どもの面倒を見ながら働く父親のように、僕には見えるのだった。僕はなぜだか全身が総毛立ち、その光景に思わず顔をしかめてしまう。

「……行こうか」

僕らは早足でその場を去り、広いロータリーになった駅前の中心にある、噴水のある小さな広場まで歩いた。

その広場にも、もはや当然のようにいくつかのぬいぐるみが置か

れていた。まるで誰かに似せたみたいに、一つ一つが違っていて、どれも妙にリアルだった。

辺りを見回す僕に、チエは真剣な表情をして言った。

「変な街だけど、別に危険はないみたいだし、ここからは別行動にしましょう。私たち別に何の関係も無いわけだし。私、誰かと一緒に行動するのって苦手なのよ」

正直一人にされるのは嫌だったけど、僕は頷く。どうせ最初から一人で来るつもりだったんだ。そもそも自分から話しかけてきたくせに。

僕はそんなことを思いながら、遠ざかるチエの小さな後ろ姿を見送った。かわいそうなチエは、すぐにまばらにいる駅から出てきた人たちの影に隠れて見えなくなってしまった。

彼女の姿が完全に消えてしまうと、僕も朝の光を浴びながら歩き出すのだった。

駅前ほどじゃないにせよ、街中にもところどころにぬいぐるみが置かれているのを見かけた。だいたいが手のひらに収まるか、もう少し大きいくらいのサイズだ。

街自体は、少し変わっているとはいえ、不自然という程でもなかった。

ランタンが並んでいたりヨーロッパの街のようにも見えるけど、やっぱりそこは日本だとよく注意すればすぐに分かった。モダンな雰囲気を取り入れた日本のどこにでもありそうな街、そこはそんな街だった。比較的新しい住宅が立ち並ぶ地域や、旅行者を狙ったレストランの多い地域すらあった。

それでも、その街で暮らす人たちは明らかに異常だった。

すれ違うほとんどの人たちが、一つから、多くて三つのぬいぐるみを、まるで死にかけのペットを抱えるみたいに優しく抱いて歩いていた。

僕はどうしてもそのぬいぐるみのことが気になって、通りを横切っていたおばあさん呼び止めて聞いてみた。

「それさ、どうしてぬいぐるみなんて抱いてるの？」

花柄の帽子を被ったおばあさんはまず不思議そうな顔をして、しばらくすると合点がいったとでもいうようにぱちんと手を叩いた。

「あなた、ここに来たばかりなのね。それじゃあ無理もないわ。このぬいぐるみはね、私の大事な一人息子なのよ」

「でもそれ、ぬいぐるみじゃん」

「ほほほ、確かにそう見えるかもねえ。でも確かにこの子は私の息子で、魂はちゃんとここに入っているのよ。ね、トシオちゃん」

そう言っておばあさんはぬいぐるみの口を指で押さえつけて、ぬいぐるみを無理やり笑わせるのだった。

トシオちゃんが無表情な動かない目で僕を見つめるから、僕はぞっとしてすぐに目を逸らした。

話を通じない人間っているけど、トシオちゃんを抱くおばあさんはそいつらとよく目が似ていた。何かを信じて疑おうとしない、柔和な目。

「あ、そうなんだ」

僕は精一杯の苦笑いを返しながら頭を下げ、その場から逃げ出した。トシオちゃんの笑顔はしばらくまぶたに焼き付いて離れなかった。

子どものぬいぐるみを抱く人、親のぬいぐるみを抱く人、恋人のぬいぐるみを抱く人、ごく稀にだが、犬や猫なんかのペットのぬいぐるみを抱く人もいた。そして彼らはぬいぐるみを抱いていない僕

を訝しそうに眺めて通り過ぎていくのだった。

僕はひどく嫌な気分を噛み潰しながら通りを歩いた。

「さあ、まずは……」

ちょっと早いけど気持ちを切り替えて、今晚の宿を探さないといけない。こういう時こそ現実的な考え方をしなくちゃ。と、僕はさつき通った細い通りでホテルという文字を見かけた気がして、来た道を戻り始めた。

探し始めて十分もしないうちに、僕はそのみずばらしいホテルを見つけた。

『HOTEL PET SOUNDS』

茶色のレンガはあちこちが剥げてしまい、窓ガラスのいくつかは割れたまま直されていなかった。横幅は狭く縦に長い、奇妙な建物だった。ホテルの名前が書かれた看板が壁に突き刺さっていて、夜になると光るみたいだ。きつとひどく安っぽく。

建物の中は外見に負けることなくみずばらしくて、どこかすえた臭いも漂っていた。

僕がロビーに入っていくと、狭くて暗いロビーの隅にある、びりびりに破れたソファに座っていた男が僕に気付いて顔を上げた。髪の毛を茶色に染めてよれよれのシャツを着た、見るからにだらしない男だった。

「おっちゃん！ おっちゃん！お客さんだよ」

男がそう叫ぶと、反対側のカウンターから濃い髭を生やした大男がのそつと出てきて、僕にこっちに来るようにと手招きした。僕は素直に彼のもとへ歩いた。

「おいタクマ！ 給料やってんだからサボってんじゃねえぞ。早く部屋の準備してこい！」

大男がそう叫ぶと、タクマと呼ばれただらしない男は新聞を置いてめんどくさそうに奥の階段を上がっていった。

「すまなかったな、この街は来たばかりかい？ 二泊で五千円だけど、どうする？ 泊まるかい？」

僕はカウンターの隅に置かれた、少女とその母親らしきぬいぐるみを見て少し迷ったけど、すぐに決心して頷いた。他に信用できる人がいるわけじゃないんだ。

「じゃあ決まりだ、ここにサインしてくれ。部屋は201。鍵は渡しておくけど三時までは部屋に入らないでくれ、汚ねえから。チェックアウトはあさつての八時半。何か分からないことがあれば聞いてくれ」

そう言っ大男はカウンターに鍵を置く。僕は紙切れにサインしてお金を払う。

「じゃあまた、三時過ぎに来るよ」

僕はそう言い残してホテルを出ると、外の新鮮な空気を思い切り吸い込んだ。

そして僕はほっと息をつく、そこで初めて落ち着いて、今の自分の状況を冷静に見つめ直すことができた。

赤い切符を使って乗った電車は、僕をぬいぐるみの街に運んだ。ぬいぐるみの街……。誰もがぬいぐるみを抱えた、どこか哀しい雰

囲気の街。

気味は悪いけど、すれ違うぬいぐるみを抱えた人たちの安心したような顔を見ると、あれもあれで悪くないような気がするのも確かだった。

それからしばらく僕は特に目的もなく街をうろついて、お腹が空けば個人でやってる小さなレストランでパスタを食べて、また目的もなく街をうろついた。

思った通りそれほど大きな街じゃないようで、三時を過ぎる頃には僕はぬいぐるみの街を一通り歩いてしまっていた。そこはやはり、一部を除いてなんの変哲もない街だった。街の周囲は橋の架かっていない川と山に囲まれていた。

口にするのも恥ずかしいけど、ぬいぐるみの街は僕の想像したような謎の組織も特殊な仕掛けも未確認生物もない、ただのぬいぐるみの街だった。

足もくたびれてきたし、そろそろホテルに戻るかな……。

そう思っただけ止まった駅前の噴水のある広場から引き返そうとしたとき、僕は向こうからやってきたチエとばったり出くわした。

「あら、偶然ね」

「そだね」

「この街、ぶらっと歩いてみたんだけど、なんだか奇妙な街よね。懐かしいような怖いような……。」

「そういえばモリカワくんは、今日泊まる場所は見つけたの？」

「うん、ペットサウন্ズっていうボロっちいホテル」

「ペットサウন্ズ？そんなホテルは見かけなかったわね。私はペニレーンって小綺麗なホテル。二泊分の料金しか取らないところを見ると、私たちがみたいに新しくやって来た人たちからお金を取ってやっているホテルみたいね」

「そっぴいえば特に気にしなかったけど、ペットサウন্ズも二泊分の

料金だったな。僕は髭の大男とだらしなない男の顔を思い出した。

「そうそう。あなたも街を回って見たなら、あの建物を見たでしょう？」

『あの建物』、僕にはチエが言う建物のことがすぐに分かった。街のおそらく中心にある、大きな建物。バニラ色に塗られた壁に大きな木でできた引き戸の付いた、どこか神聖な雰囲気を持つ不思議な建物。アパートでもなければ、何かのお店っていう雰囲気でもない。まるで知らない国の教会か、秘密の集会所みたいな……。

「何だろうね、あれ？」

「さあ、私に聞かないでよ」

「まあ、そうだよね」

「それじゃ、そろそろ行くわ。特に必要なさそうだけど、一応気を付けてね」

そう言ったチエの表情はどこか落ち着いていて、何時間か前に見たときよりは随分とリラックスして見えた。相変わらず化粧は崩れたままだったけど。

チエと別れた僕は真っすぐにボロホテルへと向かう。腕時計は二時半を差していた。

ホテルのロビーにはタクマがもう僕を待っていて、ボリボリと頭を掻きながら僕を出迎えてくれた。

「おっちゃんはちょっと買い出しに行っていていない、なんたって久々の客だしな。夕飯ができれば呼びに行くから、それまで部屋で好きに過ごしてくれ」

僕は頷いて、奥の階段をぎしぎしと音を立てて上がる。

二階の一番手前の部屋が僕の部屋だった。奥にも部屋は続いていたけど、元々そういう色なのか汚れなのかすらよく分からない茶色いカーペットの敷かれた廊下を、僕はそれ以上進みたいとは思わなかった。

鍵を差し込んでがちゃりと回すと同時に、目の前につーっと蜘蛛が降りてきて、僕はため息を吐いて蜘蛛を手で払いのけた。

狭い部屋だった、ベッドと小さな丸いテーブルがあるだけの簡素な部屋だ。入り口のそばにドアが一つあるのはユニットバスだろう。とにかくその部屋にあるどれも古臭くて、色がくすんでいて、変な臭いがした。

さすがにシーツは洗っているみたいだけど、それもところどころ破れてしまっている。僕はとりあえずその上に腰を下ろすことにする。

外はいい天気で、少し開いた窓からは気持ちのいい風が入ってきていた。

ぼんやりとするうちに、僕は母さんのことを想っていた。優しく、まともだった頃の母さんを。

小学校の運動会におにぎりを作りすぎてきた母さんを。終わりそうにない宿題を手伝ってくれた母さんを。父さんと一緒に笑い合う母さんを。綺麗で授業参観に来ると自慢だった母さんを。僕にひどい事を言われて辛そうな顔でうつむく母さんを。よく寝坊して照れたように笑う母さんを。僕のことを忘れてしまった母さんを。

僕はそこでただ、泣き出してしまふのを必死でこらえることしかできなかった。

遠くで聞こえる耳障りな音で僕は目を覚ました。意識がはつきりしてくると、それがドアを叩く音だっていうことに気がついた。いつの間にか眠ってしまっていたみたいだ。

「寝てたのかよ、ひどい顔してるぞ。三階が食堂になってて、もう夕食が用意できてるから、顔洗って来いよ」

僕の顔を見てそう言ったタクマは、先に階段を上がっていった。

ユニツトバスには二度と落ちそうにない汚れのこびりついた鏡が置いてあつて、確かに僕はひどい顔をしていた。

とりあえず寝ぐせだけ直して、軽く顔を洗うと部屋を出て食堂へ向かった。

食堂は二人掛けの小さなテーブルが三つ置いてあるだけの粗末なものだった。でも僕はホテルペットサウন্ズの中で唯一、その場所の雰囲気はひどく気に入った。

ただ汚いだけじゃなくて、そこにはどこか人を落ち着かせる秩序のようなものが確かに存在していた。それは例えば照明の具合だとか、コーヒーの香りだとか、机の配置だとか。

テーブルの一つに腰掛けると、すぐにタクマが奥から料理を運んできた。

奥が厨房になってて、きつとあの大男が料理を作っているんだろう。熊みたいな大男ってなぜだか料理が好きなんだ。

「ほいどうぞ。ここ、汚いけど、料理だけはなかなかいいもん出すんだよ」

タクマがそう言って置いていったのは、サラダとグラタンとコーヒーだった。どれもシンプルに見えるけど、なかなか凝った味付けをしているようだった。

僕がその久しぶりに心から美味しいって思える料理を味わっていると、タクマと大男もそのうち空いた席に着いて同じ料理を食べ始めた。家庭的っていうか何ていうか……普通のホテルなら考えられないことだ。

「この料理、あなたが作ったの？」

僕はスプーンでグラタンを口に運ぶ大男に聞いてみた。大男は手を止めて、僕の方を見る。

「もちろんそうだ。うちにコックを雇う余裕なんてないしな。どうだい、美味いだろう？　そういえば自己紹介がまだだったな、俺はマツモトつつんだ」

「とても美味しいよ、マツモトさん」

僕がそう言うと、マツモトはわっはっはって豪快に笑った。

「この味が分かるなんて、坊主、なかなか通だな」

「おっちゃん、料理だけは上手なんだよな」

「うるせえぞタクマ。お前もこのくらいの料理くらい早く作れるようになりやがれ」

僕ら三人（っていうかほとんどタクマとマツモトの二人）はそうやって取り留めのない話をしたりしなかったりしながら、皿の上の料理を空にしていった。

「僕はもう部屋に戻るよ。本当に美味しかった、ありがとう」

僕がそう言って立ち上がると、大男マツモトは急に真剣な顔になっ

「ひとつだけ言わせてくれ。こっち側に来たお前には、これから驚くことや不思議なことがたくさんあると思う。大事なのは冷静に、最良の判断をすることだ」

僕は頷き、食堂をあとにした。あなたは冷静な判断をしてここにいるの？ もちろんそんなことは聞けなかった。

部屋に戻ると僕は急に手持ちぶさたになってしまった。腕時計を見るとまだ時計は八時前。ニンテンドーDSでも持ってくればよかったかもな、僕はそんなことを思った。

とりあえず軽くシャワーを浴びて、テレビもラジオもない、ぬいぐるみすらないその部屋で何をするでもなくのんびりとした時間を過ごしていた。

ぬいぐるみの街、僕の知らない世界、か……。

やがて異変に気付いたのは、窓の枠にちょうどぽっかりと丸い月が収まったときだった。時計は九時四十五分を差している。

最初は風の音か何かかと思った。でもその音が少しずつ大きくなっていくにつれ、一つずつ数を増やしていくにつれ、僕はその音の正体に確信を持つようになった。

鼻をすする音や、鳴咽を漏らす音、それは誰かがひっそりとすすり泣いている音だった。

それは一つや二つじゃなかった。その音はいつの間にか何十、何百という厚さになってこの街を、そして僕までもを包み始めていた。まるで、街が泣いてるみたいだ。

僕はいつの間にか、街中に響くすすり泣きの圧力に震え始めていた。恐怖と、言いようのない心細さに。窓の外の路地裏には人っ子一人見えず、僕をさらに不安な心持ちにさせた。

僕には頭の中で妻と娘のぬいぐるみを抱いてすすり泣くマツモトの姿が簡単に想像できた。僕の切符を見た駅員さんがすすり泣く姿が、トシオちゃんを抱いたおばあちゃんがすすり泣く姿が。

僕は布団に潜り込んで目を閉じるけど、街を包み込んだその悲しいすすり泣きが消える気配なんてなくて、その音はドアや窓のすき間から部屋に入り込んで、僕のベッドの中にまで次々と潜り込んできた。

ここは、狂ってる。僕は必死になって両手で耳を塞ぐ。うるさい！ うるさい！ うるさい！

僕がベッドの中で身じろぎすると、ようやくその手に触れる冷たいものの存在に気付き、初めて自分も泣いていることを知った。

「かあさ、母さん……」

涙は両方の目からとめどなく溢れ出し、シーツをぐっしりと濡らしてしまっていた。僕はぬいぐるみを抱く代わりに、枕を力強く抱きしめた。

街中から聞こえるすすり泣きは十二時を過ぎる頃から一つまた一つと減っていき、一時を過ぎる頃にはほとんど聞こえなくなってしまうた。

僕もその頃には泣き止んで、気分も大分落ち着いていたけど、昼に少し眠ってしまったせいかな全然眠れなくて、悲しみの残るぬいぐるみの街の端っこでなんとなく窓からの景色をただただ眺めた。

真っ暗な景色。もう街灯だって眠る時間だ。

僕は高揚しきっていた気分を抑えるためにチエのことを考えながらマスターベーションをして、罪悪感と陶酔感の中でようやく深い眠りに落ちた。

街はしんとしていて、くだらない僕を優しく包んでくれていた。気がした。

RAGDALL TOWN (下)

「もう坊主にも分かっただろう？ここは大切な人を失った人たちが暮らす街だ」

そう言ったマツモトはどこか寂しそうで、僕はその顔を見つめていることができずに目を逸らしてしまう。

朝の食堂には僕とマツモトの二人しかいなかった。目の前にはサンドイッチとオレンジジュースが並んでいる。

「マツモトさんは奥さんと娘さんを、その……」

「ああそうだ。交通事故だった。運転していた俺だけが助かって、助手席と後部座席に乗っていた二人は直視できない程、ぐちゃぐちゃになっちまった。どうして俺だけ、って思ったのも一度や二度じゃない。あいつらのいない世界なんて俺にとっちゃ毛ほどの価値も無かったんだ。実際の話。それでも俺は生きていた。だから俺は逃げ出したんだ。家も仕事も、何もかも捨てて。死んじまってもいいと思ってたんだろうな。」

でも、俺はこの街に来て、事故があつてから初めて安らげる時間を手にしたんだ。それはきつと、何ものにも変えられないものなんだよ。大切な人がそばにいるこの感覚は……。知ってるか？心から願えば、ぬいぐるみには死んだ人間の魂が宿るんだよ。坊主にはいないのか？大切な人は」

「いた、けど……」

僕が口ごもっているとマツモトは一枚の地図を取り出して僕にくれた。僕はその目印の付いた建物のある場所に覚えがあった。街の真ん中にある、バニラ色の壁の大きな建物だった。

「一度そこに行ってみるといい。無理にとは言わねえがな」
「うん、ありがとう」

そうして訪れた沈黙は、すぐに扉の開く激しい音に弾き飛ばされた。

「悪い、おっちゃん。また寝過ぎしまった」

「遅えぞ、タクマ！ 遅れた分はきっちり給料から引いとくからな」

僕は笑う。サンドイッチを食べると、一度部屋に戻って部屋の隅で見つけた『ライ麦畑でつかまえて』を読んだ。昼ご飯のオムライスを食べてから、ようやく僕はその建物に向けて出発した。

高い空は灰色の羊のような雲におおわれていて、今にも雨が落ちてきそうだった。

街のいたるところは相変わらずぬいぐるみ、ぬいぐるみ、ぬいぐるみ……。でもそれはただのぬいぐるみじゃなかった。街を歩く人々が抱いているのはモノじゃなく、彼らにとって親愛な人そのもののように見えた。

もう僕はそんな風景に違和感を感じなくなっていた。

建物に向かう途中で、僕はぬいぐるみを抱いてない子どもを見かけた。それはよく見ると、この街に来たときに電車の同じ車両に乗っていた子どもだった。

小学校高学年くらいだろうか、黒いランドセルを背負った少年からは真面目そうな雰囲気が出ている。ピシッと揃えられた襟足とか、歩き方とかそういうものから。

その子どもはひどく不機嫌そうな顔をして通りを歩いていた。彼も僕を覚えていたんだろう。僕に気が付くと、こちらに近づいてきた。彼は僕の目の前に立つとこんなことを言った。

「あなたもここの住人になるんですか？」

「ここの、住人？」

僕がそう問い返すと、少年はふうと神経質そうなため息を吐いた。なんだかムカつくガキだった。

「もしあなたがこの街を気に入れば、あなたはぬいぐるみをもらって一生ここに住むことができるそうですよ。そんなことをする人たちの神経が、僕には理解できないですけど」

僕はその少年に対して何か言い返そうとしたけど、すぐに思いとどまった。僕は別にこの街の住人って訳じゃないんだ。

「僕が勉強だけしていれば父さんは満足なんだ。別に僕じゃなくたって、ロボットでもいいんだ。ただ父さんの言うことを聞いて勉強していれば……」

ぶつぶつとそんなことを言っていた少年は、そこで我に帰ったのか、ふと僕を見上げると顔を赤くして走り去っていった。

ここは愛する人を失った人たちの街。愛さず愛されたことのなかった人には、きつとどこよりもくだらない街に見えるんだろう。そして、僕にとっては……。

まるでロールプレイングゲームに出てくる教会から十字架を取り外したみたいで、チープな建物だ、僕は改めてその建物を見つけてそんなことを思った。体育館くらいの大きさだろうか。縦に長い洋風建築に角度のきつい屋根が乗った建物だ。

僕は三秒だけ迷って、正面の扉をぎいと開いた。

「やあ、よく来たね」

そう言っ僕を出迎えたのは五十代くらいの、黒くひらひらとし

た神父が着るような衣装に身を包んだ男だった。妙に黒々とてかっ
た髪と、その下の笑顔を貼りつけたみたいなきな顔を見て、あま
り好きになれそうにないタイプだと僕は勝手に思った。

彼はまるで市役所の受付みたいに、僕の胸くらいの高さのある仕
切りの向こうに立っていた。仕切りを挟んでこちら側には椅子が五
客並べられていて、そのうち一客には鼻をすすり、ハンカチで目元
を拭う若い女性が座っていた。受付を正面にして左手の方向には、
二つの同じような形の質素な扉が並んでいる。

「初めてなら説明しよう。左側の扉がぬいぐるみ工場、ぬいぐるみ
を作る。右側の扉が魂呼びの部屋、ぬいぐるみに魂を吹き込む。簡
単さ」

神父のような男の明るい声は、その部屋の雰囲気完全にそぐわ
なかった。だってその部屋の雰囲気っていったら、まるで葬式みた
いに重苦しかったんだ。彼は続ける。

「写真、似顔絵、写メール、何だっていい。その人の特徴の分かる
何かがあれば、あとはうちの職人たちに任せておけばいい。そうし
て出来たぬいぐるみに、私が魂の一部を本人から借りて吹き込む。
その人が生きていようがいまいが、魂が宇宙から消えたりしないも
のなんだよ」

「あの……」

僕があまりに唐突でどうすればいいのかわからずに口ごもってい
ると、神父はさらにまくし立てた。よく喋る男だ。

「いや、いいんだ言わなくて。君くらいの子どもにだって、死にか
けのおじいさんにだって、何かを失う痛みっていうのは平等なんだ。
その痛みから逃げることは、決して間違ったことじゃないんだ」

そこで男はひと息ついて、またにつこりと笑って話し始める。

「さあ、もし君に大切な人がいるなら、ここにサインしてくれ。それで契約完了。君は大切な人のぬいぐるみを手にして、二度と誰かを想って悲しむことはなくなる。だって君の大切な人はいつだって君のそばに居続けるんだからね。

ん、私かい？私はこの街の町長でシンオカという。魂を呼べるのは本当だがこの格好は趣味だ、気にせんでくれ」

そしてシンオカは僕に一枚の紙を差し出した。そこには『住民登録用紙』と書かれていた。さっきの少年はここに来たんだろうな、僕はあの口ぶりを思い出してピンときた。

その紙を受け取った僕の頭に浮かぶのは、優しい時の母さんだけじゃなかった。僕は激しい雨の降ったあの夜のことを思い出していた。

「僕は……ここの住人にはならないよ」

「そうかな？私には君がひどく迷っているように見える。まあ電車が発券する明日の九時までに、決めてくれたらいいよ」

それだけ言い残してシンオカは魂呼びの部屋に入ってしまった。

やがて外に出ようとした僕の後ろで、椅子に座っていた女性が魂呼びの部屋から出てきたシンオカからぬいぐるみを受け取っていた。短髪の、利発的な顔をした若い男性のぬいぐるみだ。

「分かるわ！この中に彼がいる。私、分かるもの。ああなんてことなの！」

僕はその言葉を聞き終わらないうちに、扉を開けて外に出た。

本当は、ひどく迷っていた。だって母さんが変わってしまったあの日から、僕の胸は寂しくて悲しくて何度も張り裂けそうだったんだ！

でも、だからといって、町長の話をすべて鵜呑みにすることはできなかった。彼は二度と誰かを想って悲しむことはなくなる、って言ったんだ。じゃあ、あのすすり泣きの理由はなんだっていうんだ。ぬいぐるみを抱いてひどく満たされた表情の女性が扉から出てきて、僕はどうしてかそこから逃げるように歩き出した。

僕はそのまま建物にそって歩いていく。体育館くらいの大きさだろうが、僕は昨日その大きな建物を見つけたときに見つけたはずの窓を探す。

見つけた、あれだ。正方形のその窓の向こうには、間取りの魂呼びの部屋があるはずだ。そこを覗けば、何か分かるかもしれない。よく考えれば魂を呼ぶって話も何だかうさん臭い。この通りはちょうど人通りも少ないし……。

僕はそのままだらくそこで迷っていたけど、やがてその窓に背を向けてしよぼしよぼとボロホテルへと帰っていくのだった。

ペットサウন্ズの前にはタクマが腕組みして立っていた。何をしてるんだろう？僕がちよつと離れて訝しんでいると、すぐにタクマは僕に気付いたようで片手をあげた。僕もそれを返す。

「お前を待ってたんだ」

タクマはそう言うてにやりと唇の端を上げるようにして笑った。それは本当にイヤな顔で、僕は彼が何だか良くないことを考えてるって気がして無意識のうちに半歩下がってしまう。

「俺はさ、今まで何人もこの街に来た奴を見てきたんだ。そいつらはこの街に留まったり、二日でこの街を去っていったりした。でもそいつらは結局のところ、この街のことを大して分かっちゃいなか

ったんだ」

「どういうこと？」

「お前も聞いただろう？あのすすり泣きを。大切な人を失った悲しみはな……。いや、やめとこう。今夜九時にここで待ってる。お前にこの街のゲンジツを教えてやる」

それだけ言うとタクマはドアを開けてペットサウন্ズの中に入っていた。ズリ下ろしたズボンからは派手な下着がのぞいていて、僕はこの世界と今までの世界が繋がってるってことを実感するのだった。

夕食の席にタクマの姿はなく、僕とマツモトは二人、隣同士の席でスプーンと皿がぶつかるかちゃかちゃという音を立てていた。やっぱり、ここのご飯はすごくおいしい。

タクマがいない理由をマツモトに聞いてみたけど、返答は「今夜は休みだ」という短いものだった。その後にはそりと呟いた「あの馬鹿が……」、という言葉が耳からずっと離れなかった。

それから夕食を食べ終えるまで（今日の夕食はエビフライと白ご飯、そしてかぼちゃのサラダだ）、僕らは何も話さずにただモグモグと口を動かした。

「この街は悪くないよ、そう思えわないか？」

僕が部屋から出ようとしたとき、食器を片付けていたマツモトは僕の顔を見ずに言った。

「分からない、分からないよ」僕はゆっくりと扉を閉めた。

分からない。僕は本当に分からなかったんだ。誰が正しくて、誰が間違っているのか。どの行動が一番純粹で、どの行動が一番理に適っているのか

僕は自分が母さんのぬいぐるみを抱いて過ごす姿を想像してみた。ゾツとする反面、想像の中の僕は暖かくてひどく心地良い場所で穏やかに暮らしているみたいに見えた。

九時になる十分前に僕は部屋を出て約束の場所に向かった。そこにはもうタクマが立っていて、僕を見つけると何も言わずに歩き出した。僕はその後ろを早足でついて歩く。

「俺はお前をこの街に留まらせたかった訳じゃない。かといってこの街から出て行って欲しい訳でもない。ただ知って、その上で判断して欲しいだけだ」

前を向いたままタクマは独り言のように言う。僕はその背中に声をかける。

「どこに行くの？」

「行けば分かるさ」

「僕以外のここにやって来た人には、その場所のことを教えないの？」

「ああ、お前だけだ」

「どうして？」

「俺がこの街にやって来たとき、お前と同じくらいの年だった。理由っていえば、それくらいのもんさ」

それきりタクマは何も喋らなくなって、ランタンの灯る通りを二人ただ歩いた。空は相変わらずどんよりとして、やがてぱつりぱつりと小粒の雨を僕の頬に当て始めた。

タクマは大通りを左に折れて細い路地に入り、そこをしばらく進

むと、また左に折れてさらに細くて汚い道へと入っていく。僕は何年も前に置かれたようなポリバケツやら首から綿のはみ出たぬいぐるみやらを避けながら、その背中を見失わないように歩き続けた。

雨はいよいよ本降りになってきたけど、アパートのような建物の挟まれた道が細すぎるおかげで、僕らはほとんど雨に濡れることはなかった。

「さあ着いたぞ」

そこはまるでバーの裏口のような場所で、立ち止まった僕らの目の前には地下へと続く暗くて細い階段があった。階段の脇には看板のようなものが立てかけられていたけど、いつからそこにあるのか、その文字はかすれて読み取ることができなかった。

タクマが先に下りろよと手を出して促すから、僕は頷いて、おそろおそろその階段を一步ずつ下りていった。

階段には雨でできた足跡が付けられていて、誰かがついさっきここを通ったことが分かる。階段を下りきって、僕は固くて重そうな扉の前に立った。赤い塗料の剥げ落ちた扉は、僕に何だか嫌な予感を覚えさせる。

扉を押し開けて中に入ると、雨の音は急に遠ざかり、僕はなんだか世界から追い出されたような気持ちになった。

そこは狭い待合室のような部屋だった。部屋に入って左奥には誰も座っていない代わりに二つのぬいぐるみが置かれたソファがある。その向かいには壁で部屋が仕切られていて、四角く壁が抜かれた部分から中年男性の顔の下半分だけがのぞいていた。

まるでラブホテルみたいだ、僕はそう感じた。行ったことはないけれど、僕はラブホテルの受付がそうやって仕切られていて、お互いの顔が分からないようになっていて、知っていた。そして仕切りの向こうの人間は、僕らが近づいていくと言った。

「いらつしやいませ」

「ああ」タクマは答える。

「性別と、年齢を」

「女性だ。年齢は……二十から三十くらいで頼む」

「身長と体格は？」

「分かんねーよ。その辺は適当に頼む」

「……かしこまりました。その他ご希望の身体的条件等ございますか？」

「そういうのもいいよ。どうせ今日は買う気はねーんだ。適当に見せてくれ」

「かしこまりました。F 1からF 7まで、ご自由に閲覧ください」

僕にはタクマと男がどういったやり取りをしているのかよく分からなかった。ただ緊張してタクマの横に立って、その成り行きをじっと見守った。

「この紙を係の者に渡せば係の者がご案内します。気に入った体が御座いましたら係の者をお呼びください。その後、顔の相談をお受けいたします」

そう言った男は正方形の白い紙に『F1～F7』という赤いハンコを押してタクマに渡し、それを受け取ったタクマはすぐにその紙を僕に手渡す。

「これを持って奥の扉から中に入れ。そう身構えなくたっていい。大したモノがある訳じゃないよ、ただちょっと哀しいモノがあるだけさ」

タクマはいつになく真剣で、どこか遠い目をしていた。僕は頷い

て、受付の横にある扉を開いて中に入った。

そこは薄暗くて細長い通路になっていて、等間隔に扉がずつと並んでいた。同じよう等間隔に並ぶ小虫のたかる蛍光灯が、本当に小さく見えなくなるほどに奥へと続いていた。

入口のすぐ脇には片方の眼球の白濁したおじいちゃんが立っていて、僕は係の者であろう彼にさっきもらった紙を手渡した。

「こちらにどうぞ」

それだけ言つて係の者のおじいちゃんは一番手前の部屋、F 1とだけ書かれた無機質な扉の鍵を開けてくれた。僕は唾をぐくりと飲み込んで、一人その扉の中に入った。

全て裸だった。そこにある何十体という女性の体は、どれも一系まとわぬ姿でただそこに並べられていた。そしてその体の全てに首から上の部分、顔がついていなかった。僕はその体に近づいてその陰毛や胸の質感、そして精巧に作られた性器を目にして初めて、その体は何のために作られているのかを知ると同時に、胸に泥が詰まったような生理的な嫌悪感にも似た気持ち悪さを感じて顔をしかめた。

そうだよ、所詮は人間なんだよ。僕はまず、そんな風に思った。だつてそうだろう？ めいぐるみたいなおもちゃを抱いている

よりは、より本人に近い人形を抱いていたいに決まってるんだ……。

僕はそんな人形を一つ一つ眺めていく。そのうちの一つ、左の胸の横にほくろのある人形を見つけた瞬間に、僕の中であの夜の光景がフラッシュバックして不安定だった僕の神経をさらに揺さぶって次第に膝も震えだして目頭の熱くなった僕はもうそこに立っているだけで精一杯っていう感じだった。

「クソッ。何だよ、何だつてこんなモン見せるんだよ！」

悔しかった。この街に住むのも悪くないんじゃないかと思った自分に。この街の人たちの愛情の純粹さを信じ切っていた自分に。どうしようもなく勃起している自分に。僕はただ無性に腹が立ったんだ。

僕は扉を開いて外へ出ると、係の者を睨みつけてさらにタクマの待つ待合室への扉を思い切り開けた。

タクマは僕の興奮した様子を見て焦ったらしく、弁解するように言った。それがさらに僕を苛立たせるなんて想像もしないで。

「おい、何を怒ってるんだよ。俺はただこの街の上っ面だけで全てを判断するんじゃないぞ、って言いたかっただけだ。ここではな、魂の込められたぬいぐるみ以外に、人の形をしたものを作ることは禁止されてるんだ。なぜだか分かるか？」

煩い。

「それはどんなに本人に似せた人形を作ったってな、その人を失った悲しみや苦しみは減ったり消えたりすることは無いって分かっているからさ。絶対にな。特にあんな人形とやっちまった夜には、虚しくて虚しくて本気で死のうかと思ったよ」

煩い煩い。

「ぬいぐるみはリアルじゃない、一時的に寂しさを癒すという意味では、ちょうどいいかもしれない。それにどうやら町長が魂の一部を呼べるっていうのも、完全にデタラメって訳じゃないらしい。それでもこの街の誰もが本当は分かっているんだよ。失ってしまった人はもう二度と戻らないし、悲しみは消えないっていうことをな。だからこそ、彼らは泣かずにはいられない」

煩い煩い煩い煩い煩い。

「この街はな、マトモじゃないんだよ。誰もがその目の焦点を過去に結んでる。そして良く着く果ては、ぬいぐるみじゃ我慢出来なくなつて、愛する人にそっくりな人形を手に入れてはもう二度と会えないっていうことを実感してすすり泣いている。そんなのがマトモって言うるか？」

「うるさい！」

僕はタクマを突き飛ばしてそのまま外へと飛び出して階段を駆け上がる。雨はさらに勢いを増していたけどそんなの知るか。僕はどしゃ降りの中を目的地もなく走り出す。びしょ濡れの僕は自分が泣いているのかすら分らない。何で泣いているのかすら分らない。ただ僕はどうしようもなくムシヤクシヤしたこの気持ちを解消する方法を他に知らなかったんだ。

やがて一つ二つ、雨の音に混じって誰かのすすり泣く音が聞こえてきた。僕はさらに苛ついて目の前の壁を思い切り蹴りつける。

「うるせえ、うるせえんだよ！」

すすり泣きはやがてまた街を包んでいく。僕は負けないように、そこでただ泣きながら叫び続けることしかできない。

「あああああああああああ！　いつまでも逃げてんじゃねえチクショウ！　そんなに悲しいならもう死んじまえよ。何だよこの街は、意味分かんねえよ！　うるせえんだよお前らマジで！」

僕は胸に溜まったやり場のない気持ちをただ吐き出していく。泣いて、暴れて、叫んでいるうちに、ぬいぐるみの街は少しずつ静まっていき、そこにはただ雨の落ちる音だけが残った。

「お前らだけが辛いのかよ。僕だって。僕だって……」

やがて疲れてぐったりした僕をタクマがホテルまで運んでくれた
って知ったのは、次の日の朝になってからだった。

僕は九時の電車に乗ってこの街を出ることを決めた。それはわざわざ言わなかったって、一緒に食事をするタクマとマツモトにも分かってるみたいだった。

朝の光の差し込む食堂には僕とタクマとマツモトと、二つのぬいぐるみの姿があった。マツモトの奥さんと娘さんだ。

「お客さんがいないときは、いつもこうして四人で食事してるんだよ」

そう言っただけのような表情を見せるマツモトに、タクマはからかうように言う。

「全く、いつまでたっても家族離れができないんだからさ」

それは少しいびつにしろ、一つの家族の形であるように僕には思えた。

食堂を出るときに僕が「さよなら」と言うと二人は少し寂しそうな表情をしてみせた。彼らは言葉に出してそうとは言わなかったけど、できることなら僕にこの街に残って欲しかったのかもしれないなんて、考えすぎだ。

僕はホテルペットサウンスをあとにする。背中にはリュックサック、ポケットには赤い切符が入っている。

朝のぬいぐるみの街を歩く。そこにはいろんな人が歩いていて、その誰もが大事そうにぬいぐるみを抱えていた。男の人、女の人、若い人、年寄り、髪が黒い人、茶色い人、中には肌が白くて目が青い人もいた。

そんな人たちを眺めながら歩く僕は、自分が寂しいと感じていることに気が付く。そうだ、僕はいつの間にかこの街が好きになつていたんだ。

でも僕は歩くのをやめない。

だって僕は教えてもらったんだ。誰かを失った悲しみは、決して消えないってことを。

だから僕は歩くのをやめない。ひょっとすると僕はまた逃げてるのかもしれない。悲しみと向き合うこと、過去と向き合うこと、そして逃げることから逃げたとき、一体僕はどこにたどり着くんだろう？

風がびゅうと吹いて、ぬいぐるみを落とした若い男は慌てて転がるぬいぐるみを追いかけていた。僕は少しはにかんで、また歩き始めた。

「私、この街にいることにしたわ。彼と一緒に」

駅前で髪の長い男性のぬいぐるみを抱いて僕のことを待っていたチエがそう言っても、僕はそこまで驚くことはなかった。

彼女の表情は本当に穏やかで、現実の世界で嫌なことを思い出して傷つきながら生きるよりも、こっちの世界できれいな過去だけを見つめて生きる方がよっぽど彼女にとって良さそうに感じた。何より化粧もしっかりされてるし。

「これ、あなたにあげるわ」

彼女がそう言って差し出したのは、川田千恵という名前の書かれた赤い切符だった。

「私、もうあの世界で生きるのに疲れちゃったのよ。幸いこっちで寄ったカフェで店員を探してみたいだし、まあ何とか頑張ってみるわ。じゃあ元気でね」

「うん、チエも元気で」

「だからチエさんだって」

僕らは手を振って別れた。雲のすき間からのぞいた晴れ間は、川田千恵の背中を明るく照らしていた。

相変わらずたくさんのぬいぐるみの置かれているホームには意外と人がいて、降りる時は意識しなかったけど意外と多くの人が電車に乗っていることに気がついた。

「ドアが閉まります。駆け込み乗車はご遠慮ください」

しゃがれ声がそう告げて、僕らの電車のドアが閉まる。僕が座席につくと、電車はゆっくりと走り始める。もう、戻れない。

たった二日間しかいなかったはずなのに、それはもっともっと長い時間だったような気がした。遠ざかっていくぬいぐるみの街を、タクマやマツモト、そしてチエのことを記憶に留めておこうとするみたいに、僕は頬づえをついて眺め続けた。

しばらくして街が完全に見えなくなると、少しずつ木が多くなり、やがて街に来る前に立っていたネズミのキャラクターのオブジェが現れた。そのオブジェは、今度は僕らを見送るように機械的な動きで手を振っていた。

僕はその相変わらず不気味なオブジェに片手で軽く手を振ると、目を避けるためにゆっくりとブラインドを引いた。

シャアアアア。うるせーよ。

がたん、ごん

数えてみると（別に数えるまでもないんだけど）、その車両には全部で六人の乗客が乗っていた。

電車はまだ長いトンネルに入っている。

きっと誰もが、今自分のいる場所がどこかなんて分からないだろう。さっき切符を見て回っていた車掌が言うには、あと二時間くらいで次の駅に着くらしい。着くのはだいたい午後一時つてところだろうか。

僕は改めて辺りを見渡した。ぬいぐるみの街に向かった時に、同じ車両に乗っていた人の姿はそこにはみられなかった。彼らは他の車両に乗っているのか、ぬいぐるみの街に残ったのか……。

やがて乗客を見回す僕の視線はある男の元でぴたりと止まった。野球帽を目深にかぶった、口ひげをばさばさとはやした汚い男だ。僕はその男の顔を見たことがあった。あれは何日か前に、朝のニュースを観ていた時だった。自分で焼いた焦げたトーストと、自分で焼いた焦げた卵焼きを食べながら。

『昨夜十一時頃、市川悟さん宅に強盗が押し入り、市川悟（37）さんとその妻美里（33）さんが殺害されました。容疑者は金品を奪って依然逃走中。目撃証言から警察は近所に住む蓮井達也（34）を重要参考人として行方を追っています……』

ハスイタツヤ。帽子やひげで顔を隠しても、その特徴的なぎょろりとした目や、厚い唇はまさにあの時テレビに映っていた写真と同じものだった。僕はその二つの顔が同一人物のものと確信すると同時に、体温が下がり背中冷や汗が浮くのを感じた。

彼は僕の右前の通路側の席に座り、膝に黒いシヨルダーバックを乗せていた。僕はそのバックにハスイが生首を詰めるシーンをリア

ルにを想像して身震いしてしまう。

人殺しが、すぐそこにいる……。

全てからも逃げ出すことができる電車。それは辛いことだけじゃない。どこまでも自分のことを追う警察からだって、きっと逃げることができるんだ。

僕がそわそわとハスイタツヤを見たり目を逸らしたりするうちに、不意にそいつは僕の方を振り返り、ニヤリと口の端を上げた。僕はぞくりとして慌てて視線を窓の外に移す。

でも僕の目の端は殺人鬼ハスイが立ち上がって僕の方に近寄ってくるのをしっかりと捉えていて、僕は自分の心臓の音に押しつぶされそうになりながら生唾をぐくりと飲み込むことしかできない。

最悪だ。どうすればいい、どうすれば……。

「よっ」

ハスイは本当にどすりと音がするような勢いで僕の隣の席に座り、横柄に足を組んで僕に話しかけてきた。体格の良い体から発する体臭がひどく鼻についた。

「さっきから俺のことをちらちら見てるみたいだが、俺の顔に何か付いてるか？ あ？」

「い、いえ」

僕は何か言おうとするんだけど、口の中がべたついて言葉にならなかった。唾を飲み込む音だけが辺りに響く。誰か、誰か助けて。でも現実はそのなにごくはなく、は虫類のようなぎよろりとしたハスイの目は僕を捉えたまま離さないで、ハスイはまたおびえる僕に向かって話し始める。

「おう坊主、知ってるか？ 犯罪ってのはだいたいが自分の願望と

か、欲望とかを満たすために行われるもんなんだよ。で、それがバ
レて捕まれば全てを失う代わりに、捕まらなかったら何てことはな
い。それが詐欺だろうと殺人だろうと、人ごみに紛れて悠々と暮ら
していける。そこでだ、お前も俺のことを売ろうとしているのか？」

そう言ったハスイの目は、僕が今まで見たことのないものだった。
何の感情もなく人を殺せるような、静かで、少し血走った目。僕は
とにかく必死になって首を振ることしかできなかった。

がたん、ごとん。

電車にまだトンネルを抜けそうな気配はない。もしここが移動中
の電車なんかじゃなかったら、僕はとにかく必死でここから逃げ出
して二度とこんな所には近づかないだろう。

ハスイはそんなことを考えている僕に顔を近づけて、僕の目をじ
つとのぞき込んだかと思うと、がはははなんて下品な声を出して笑
い始めた。しばらく馬鹿みたいに笑うと、ピタリと笑うのを止めて、
今度は僕の肩に手を回して耳のそばでこう言った。

「ぬいぐるみの街だったか。あの死ぬほどくだらない街で、俺のこ
とを通報するとか騒ぎ立ててた奴がいたから殺した。お前も下手な
ことをすればどうなるか、言わなくても分かるよな？」

「は、は……」

「あの、そのくらいにしておいたらどうでしょうか」

僕が震えながら、馬鹿みたいに頭を前後に振ろうとしたとき、い
つの間にか座席横の通路に立っていた男はそう言った。

五十代半ばくらいの、決して強そうには見えないやせた男だった
けど、僕は誰かがそこにいるというだけでひどく安心するのだった。
まだ何も解決していないのに、ありがとう神様、なんて心の中で祈

ってしまうほどに。

「なんだお前。お前には関係ねーからあっちに行ってるおっさん」

僕はせっかく助けに来てくれた男がそのまま「はいそうですか」
とどこかに行ってしまったのかひどく不安になったけど、男はハスイの強い口調にも動じる様子を見せずに、毅然とした態度で言い返す。

「他の乗客の方も見ています。騒ぎになったら、あなたも困るんじゃないですか？」

ハスイはしばらく男のことを睨みつけていたけど、やがてチツと舌打ちすると立ち上がって他の車両へと歩いていった。

僕はひどくほっとして息を吐き出すと同時に、自分の下着がほんのりと湿っていることに気が付いた。ああ……なんてことだ。

「大丈夫ですか？」

男の問いかけに頷き丁寧にお礼を言うと、僕はちよつとトイレに言い残してリュックを抱えて電車内のトイレに向かった。

幸いそこまでびしょ濡れにはなっていなかったけど、僕はそれを洗ってビニールに突っ込むと新しいパンツを穿いてからいそいそと元の車両へと戻った。

「あいつがまた来るといけないから、しばらくここにいていいですか？」

元の席に戻ると、さっき助けてくれた男がまだ座っていて僕にそう言った。僕は頷き、もう一度ありがとう、と言う。

「あんな奴が同じ電車に乗っているなんてツイてない。もちろん公にはなっていないけど、ここはもう警察の力が及ばない場所なんですよ」

僕はそこで初めて男の顔をじっくり見た。その穏やかな話し方と何かを悟ったような奇妙に暖かい表情から、僕は男にひどく虚ろな印象を受けた。まるで、死に場所を探しているみたいだ。まあこの電車に乗っている人なんて、みんなそんなもんかもしれないけど。

「あなたは、どうしてそんなことを知ってるの？」

「私は警察官だったんですよ」

「警察官？」

そこで一つ、僕には不思議に思うことがあった。僕は男の横顔に問いかける。

「警察官なら、どうしてあいつを捕まえないんですか？あいつはハスタツヤっていう強盗殺人犯ですよね？」

その質問に対する男の返事は、ひどく簡単なものだった。

「もう、警察官は辞めたから」

「ああ」

僕は呟くように言った男の言葉にそんな返事しかできずに、ゆっくりと下を向いた。

男は一言で言うと、暗い男だった。虚ろという印象もそれを更に際立たせる。服装に感心が無いのだろう、皺だらけのポロシャツに染みの付いた綿パン。よく見ると無精ひげもあごから耳の辺りをお

おっていた。

「私はね」

僕がしばらくそうして黙っていると、男はまるで独り言を言うみたいに話し始めた。

「絶望したんだよ。ああいった仕事をしていると、いくつものんでもない事件に出くわす。親が子を殺す。妻が夫を殺す。老人からお金を巻き上げる。動物を切り刻む。強者が弱者から搾取した拳銃に二度と立ち直れないよう痛めつける……。そういう事件は決して減ることはない。私が何をしたって、ほとんど意味なんかないんだ。だから警察は辞めた。もう、疲れたんだよ」

僕は黙って話を聞いていたけど、一つだけどうしても言うておきたいことがあって、余計なお世話と思いながらもそれを口にした。

「でも、僕を助けてくれたよね。本当に嬉しかった。別に犯罪なんて減らせなくても、あなたみたいな人が警察官でいてほしいって思うよ」

「……ありがとう」

電車内に光が入り込んできたかと思うと、そこは一瞬で光に満ちる。電車が、トンネルを抜けたんだ。

やがて目が慣れるごとに窓の外に見えてきた景色は、とても寂しいものだった。見渡す限り緑なんてほとんどない、乾いた世界。まるで西部劇に出てくる寂れた荒野みたいなその景色は、ここが本当に日本なのかっていうことすら疑わせた。ひょっとしてここは誰かが作ったセットのようなものなのだろうか。いや、ここが名前だけ聞いたことのある鳥取砂丘なのかもしれない。

「すごいな、こんな場所があるなんて……」

男もしきりに驚いたような言葉を口にしている。だけどやっぱり、その言葉はどこか生氣に欠けている気がした。もう、疲れたんだ。そんな言葉が僕の頭に蘇った。

「あ、あれは……」

ふと僕は荒野の真ん中にまた巨大なオブジェ（と言っていいんだろうか？）が置かれているのに気付いた。でもそれが何を意味しているか、僕には理解できなかった。

そこには先端が輪になった巨大な縄が横たわっていて、その隣には同じように巨大なナイフのようなものが突き立てられていた。オブジェの全長は十メートル近くはあるだろう。どちらも硬いプラスチックか何かで作られているようだった。

「ああここが。そういうことか」

隣で男がそう言ったから僕はその顔を見上げたけど、その表情を見ると僕は男に声を掛けることができなくなった。僕には強張ったその顔が、まるで笑顔になるのを我慢しているように見えたんだ。

「当電車はまもなく次の停車駅に停まります。お降りの方は忘れ物などなさらぬよう」

しゃがれ声が電車内に響く。ふと窓の外を見ると、そこにはまるで何かをおおい隠すように、長い長い金網が横に向けて伸びていた。どこから始まったんだろう。ここから見る限り内側に婉曲しているようだから、ひよっとすると街を丸ごと覆っているのかもしれない。

「もう大丈夫だろうから、私はもう行きます。私はシミズって言います。さっきの言葉、嬉しかった」

そう言い残して、シミズは元の席に戻っていった。その少し曲がった背中では僕なんかには想像もつかないような今までの苦労を物語っているみたいだった。

僕は段々とスピードを落とす電車から、果てのない金網と、緑のほとんどない景色を眺めながら、元の世界がどんな形だったかを思い出してみた。

思い出した世界は正確なような、まるで、映画でも観ているような。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3666v/>

God only(one) knows

2011年10月9日13時26分発行